ゆう気をだして

二年

二村

みらい

「おちびさん」ってなんだろう。せがひくくて小さいこと。じぶんよりも小さい子のことを、かわいい気もするけれどほんとうはかわいいと。「おちびさん」といわれたら、なんだかことばがあい手に大きなえいきょうをあたえることではないのだとこの本からわかった。この本をすすめたことがわかりこの本を読みすすめた。

まず、この本のテンちゃんは家ぞくの中で一ばん小さい。でも、なんでもじぶんでやれると思っている。わたしもおねえちゃんが二人いて一ばん下だ。いつもおちびさん。でもずっと赤ちゃんあつかいでかわいがってもらえることはかんじている。大きい子とあそぶときには、おにごっこでタッチされなかったり小さいからととくべつあつかいだ。だけどときどきおねえちゃんにいわれることは、「小さい子は大きいのはだめ。」とおかずやおやつのことでいわれることだ。

20 × 20

そんなときは、おちびさんはいやだなと思う

だって大きい方をたべたいからね。

　テンちゃんは、てん校生の小さなマルのことをおちびさんだと思っていたけれど、いじめっこにやられているところを見て、なんとかしたいとこうどうした。せは小さくてもこころはつよくて大きい。

「わたしはちびじゃない。」

といったんだ。こまっている人、いじわるされている人に大きな声でじぶんのことばをつたえるってとてもゆう気のあることだから。

わたしは、テンちゃんみたいにできるかな。

そんなじしんはないけれど、やっぱりおちびさんじゃないから言ってみたいな。

　わるいことにはだめだとじぶんのことばでしっかりつたえられる人になりたいな。おちびさんじゃないからね。わたしはわたし。

20 × 20